服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

FROM United Kingdom

中野香織⑯

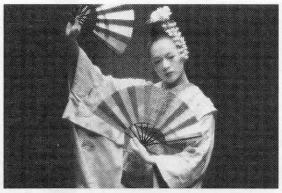
「ノー」に効いた「SAYURI」

最近は脳にまつわるご本の話題が多いですね、敦子さん。わたしのほうは、脳の問題をかんがえるというより、「ノー」の問題にうちひしがれる日々でした。

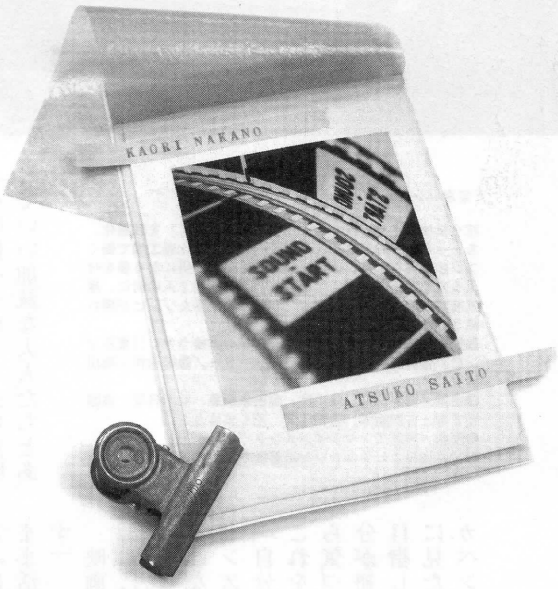
大盛りの「ノー」をつきつけられるできごとがありましてねえ……はあ……。

こういうときは活字も目に入ってこないし、カウンセラーのことばもうそくさくて上滑りするし、ひたすらアイロンがけに集中して時間をやり過ごすのが精一杯。

©2005 Columbia Pictures Industries,Inc./Photo by David James



「SAYURI」
12月10日より丸の内プラゼールほか全国松竹系にて



オブジェ制作＝井上陽子

ああでも、ほんの少し、救われたんですよ。映画に。それもなんと、まったく期待していなかった「SAYURI」に。

たしかに、芸者を目のきつい中国女優がやるし、「サンキュー、おねえさん」とか「見て見て、イッツ・スクィッド(いか)！」みたいな、日本語と英語がちんけに混じった台詞もとびかいます。でもこれは、「日本」はインスピレーションの源として使われているというだけのファンタジーワールドなのねと受け止めればいいのだと思います。

そう見れば、芸者たちのスター・ウォーズなみに宇宙的なアレンジをされた髪型や、色彩のダンスとしか表現できないような絢爛たる色使いの着物も、ファンタジー映画だからこそ可能だった独創的な美として堪能できます。

隅々まで人工美の極致を尽くされたリッチな映像に、魂がよじれるような女の情念戦争が濃厚にくり広げられて、一瞬のまばたきも惜しいくらいに引き込まれてしまったのですが、その引力のひとつは台詞と編集のリズムにもあったような気がします。

「A true geisha can stop a manin his tracks with a single look（本物の芸者は一瞥で男をとりこにできる）」の決め台詞とそれに続く呆然のシーンもそうでしたが、見守るこちらの呼吸のリズムと映像のリズムがほぼぴたりと合ったのです。

なかでもとりわけソウルにひびいたのが、チャン・ツーイーが断崖の上に立って喪失の悲しみにひたるシーン。「喪失（lost）は、考えるものではなくて、感じるもの」っていう台詞も出てきましたが、現場ではどんな仕切り屋かは知りませんが、少なくともこのファンタジーワールドでのツーイーには、ただただ一緒に呼吸を合わせて深い喪失感を共有させていただきました……。

その後少し立ち直り、茂木健一郎の『脳と仮想』を手に取ると、ウォルポールのことばに遭遇。「感じるものにとってはこの世界は悲劇であるが、考えるものにとっては喜劇である」。たしかに断崖シーンを「考える」と笑っちゃうかも。ノー体験が悲劇となるか喜劇となるか、あとは脳まかせ。